

大鳳寺跡第4次発掘調査概報

(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第6集)



1984

宇治市教育委員会

目 次

序	1
1. はじめに	2
2. 遺 構	4
3. 遺 物	7
4. ま と め	10
付. 発掘調査に参加して	12

例 言

1. 調査地の地番は、宇治市菟道西中10番地他である。
2. 現地調査は、昭和58年11月24日より昭和59年3月7日まで実施した。
3. 調査の組織は下記の通りである。

調査主体者	宇治市教育委員会
調査責任者	宇治市教育委員会教育長……………岩本昭造
調査指導者	元近畿大学教授……………杉山信三
	京都府立城南高等学校教諭……………山田良三
	京都府教育庁文化財保護課記念物係長……………中谷雅治
調査担当者	宇治市教育委員会社会教育課主事……………杉本宏
調査事務局	宇治市教育委員会社会教育課長……………小林巧
	同 文化係長……………伊藤忠正
	同 主事……………吉水利明
	同 主事……………小西弘子
調査補助員	奥田耕三・猿向敏一・田中康・佐原耕・上村和也・岸本弘司郎 岩本俊也・上田和弘
調査整理員	安川優子・小幡倫子・宝壁恭子・藤井弘美
調査協力者	奈良国立文化財研究所・京都府教育委員会・久保見勇・栗野 諤 星野猷二・常盤井智行

4. 本書の編集・執筆は杉本宏が担当し、奥田耕三・猿向敏一・安川優子の協力を得た。

序

大鳳寺跡は、昭和46年に宇治市史編纂委員会によって最初の発掘調査が行われ、本市では広野廃寺とともに白鳳時代創建の本格的古代寺院であることが確認され注目を集めた遺跡であります。

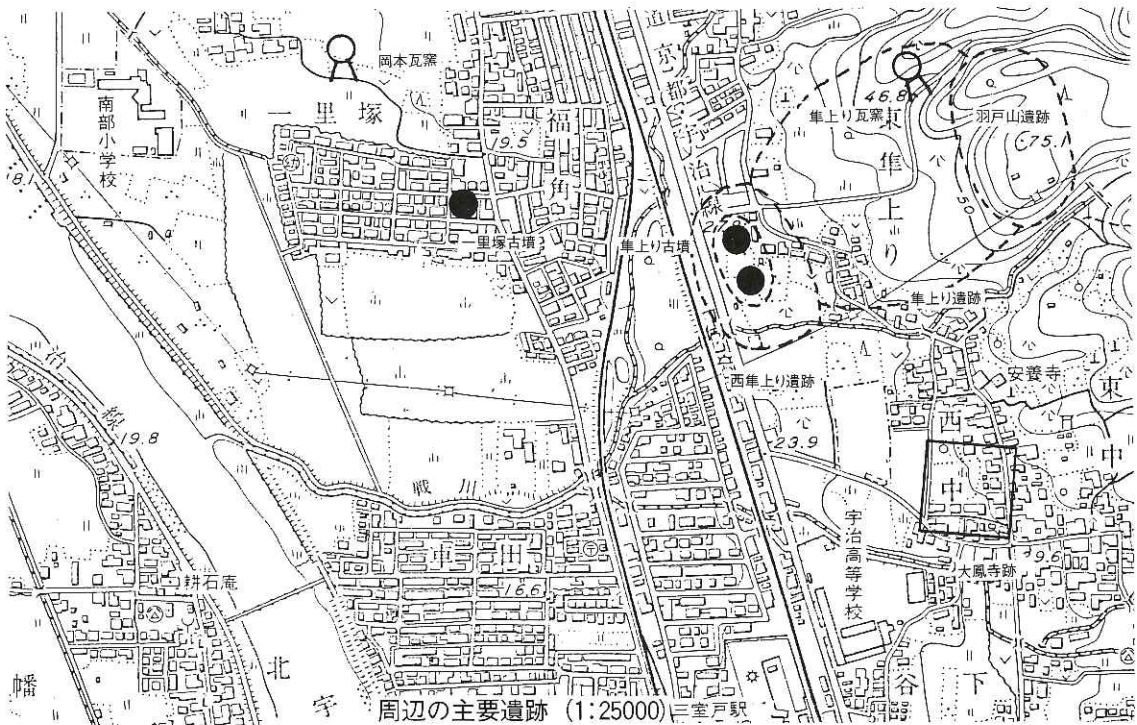
本市では、昭和57年度より国・府より国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付を受け5年計画で寺域の確認調査を進めているところでありますが、昭和58年度はその2年目にあたります。今回の調査では、寺院の北及び西限と思われる遺構を検出し、今後の寺院規模の確定に大きな手がかりを得ることができ、次年度以降も引き続き解明に努めたいと考えております。

最後になりましたが、調査を快諾していただきました地主の方を始め、調査にあたり種々ご指導ご協力いただきました関係各位、調査に従事していただきました方々に心よりお礼申し上げます。

昭和59年3月23日

宇治市教育委員会

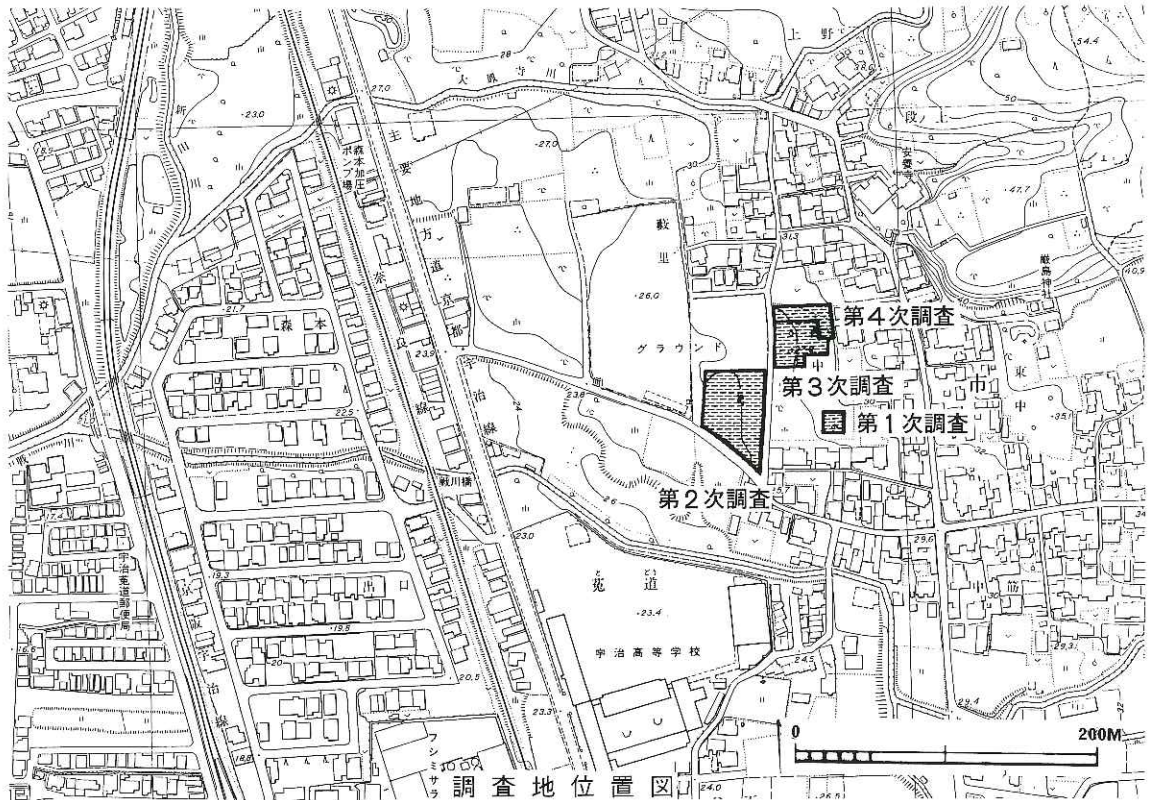
教育長 岩本 昭造



1. はじめに

大鳳寺跡の第1次発掘調査は、昭和46年の宇治市史編纂^{注1}に伴うものであり、一辺15m 後の瓦積基壇（推定塔跡）を検出し、出土した瓦より同寺が白鳳時代創建であることが明らかとなった。その後昭和54年に宇治高等学校第2グラウンド^{注2}拡張に伴い、一部が調査されたものの、計画的に寺院規模・伽藍配置の発掘調査を実施し始めたのは昭和57年度の第3次発掘調査^{注3}からであり、本年度は第4次発掘調査^{注4}にあたる。第3次発掘調査は、推定塔跡の北方30m地点を調査し奈良時代頃に埋没した南北溝を検出したものの、当初予想していた講堂もしくは回廊は確認できなかった。しかし、出土した瓦より当寺が平安時代前期頃までは存在していたことが推定でき実態解明に一步ふみ出すことができた。今回は第3次調査地の北接部であり、寺域北・西限の確認を目標として実施することとなった。

第4次調査地の現状は栗畑・竹林・畑であり、栗木をさけながら東西方向を基本に第1から第4トレンチまでの計4個所の調査区を設定した。表土及び近世の整地層をパワーショベルで排除し後は人力によった。雪・霜柱に悩まされながらの調査ではあったが、献身的に調査に参加していただいた補助員諸君に心から感謝したい。



第1次調査

昭和46年に発掘調査された。検出した遺構は一辺15mの瓦積基壇である。格子タタキの平瓦を19段、70cmに積重ねさらにその上に土壇の土盛りが認められる。茶の木を避けながらの限定された調査であったためその性格が特定できないが塔跡と推測されている。



第2次調査

昭和54年に発掘調査された。第1次調査地と道路を隔てた西側に位置する。地形的にはこの道路を隔てた西側が急に2m程低くなっている。グラウンド造成に伴う調査により明確な遺構は検出できなかったものの多量の瓦の散布が認められた。



第3次調査

昭和57年に発掘調査された。検出された遺構には奈良時代頃に埋没した南北溝、近世の建物跡、焼土壇等がある。出土した軒瓦より平安時代前期までは当寺が存在していたことが明らかとなった。

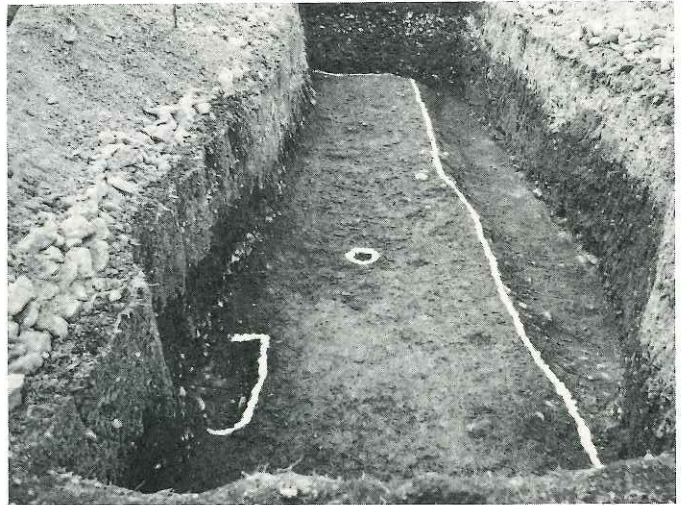


2. 遺 構

今回検出した遺構には、溝・土壇・柱穴などがある。特にこの中で注目すべきは第1・2トレンチで検出した溝SD402の存在である。この溝は第1・第2トレンチの北壁沿いに東西方向にのび第1トレンチ西端で南へ直角に曲るものと思われる。溝幅は2.3m、深さ0.5m程であり、層厚0.5mの寺院建立期の整地層を穿って造られている。その他のものとして、第2トレンチ東南壁沿いに検出した瓦溜りSK401・第3トレンチ東端で検出した近世園池SG403等がある。土器整理が未了のため詳細は不明だが、SG403を除く他のものは白鳳から平安時代に存在していた当寺の関係遺構であろう。

第1トレンチ（東から）

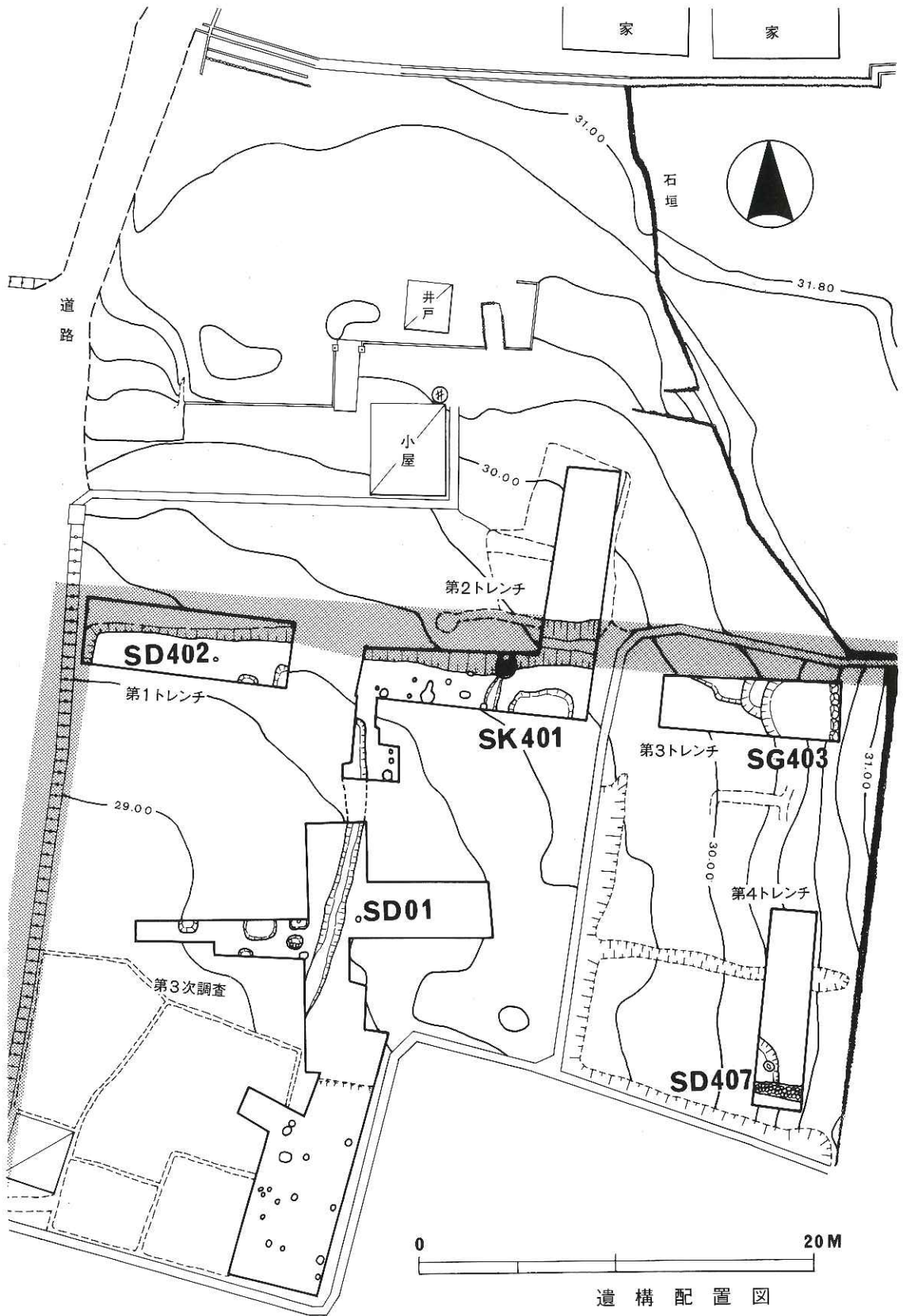
SD402の南北溝部と東西溝部とのコーナーが第1トレンチ北東端で検出された。南北溝はごくその一部を検出したにすぎないが、概ね調査地とグラウンドとの間の道路と平行する可能性が指摘できる。



第2トレンチ（東から）

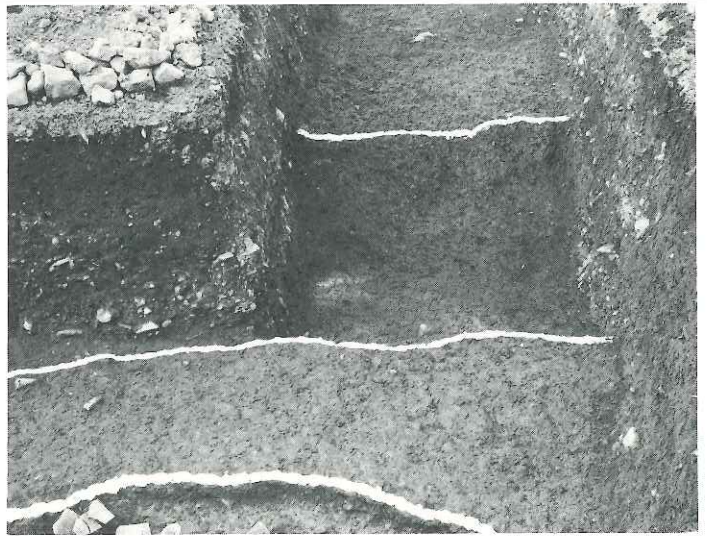
調査地の基本的な層序は上から表土・近世耕作土・中世包含層・平安時代包含層・寺院建立期の整地層・旧表土となっている。遺構は寺院建立期整地層直上で検出している。しかし、遺構の平面輪郭が不明瞭な所では若干整地層を削り込み検出している。





第2トレンチ（南から）

SD402は検出最大幅2.3m最も深い部分で0.5mを測るU字溝である。埋土は2～3層に分層でき、埋土中より軒瓦を含む瓦類が拳大～人頭大の礫に混入して少なからず出土している。土器類も出土しているがその量は少ない。



第3トレンチ（西から）

第3トレンチ東部は近世園地S G403で遺構面は失われていた。SD402については検出していない。このトレンチでは、層厚0.2m程の整地層下には青灰色粘質土層が広がっており、寺院建立以前は沼状のものが存在していたのかも知れない。



第4トレンチ（西から）

トレンチ南端部で礫のつまった溝SD407を検出した。幅0.5m・深さ0.3m程の東西溝である。層序的には寺院建立期の整地層の上にさらに整地された層より穿たれている。出土遺物がないため時期不明である。

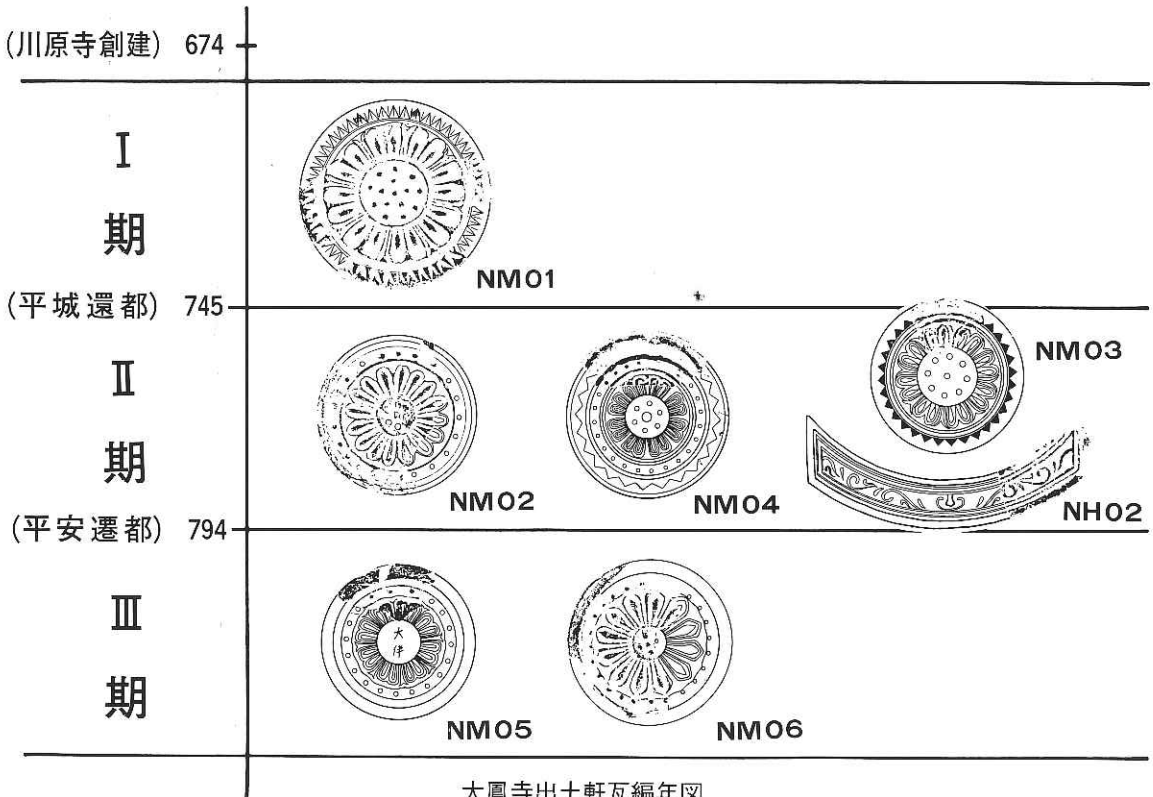


3. 遺 物

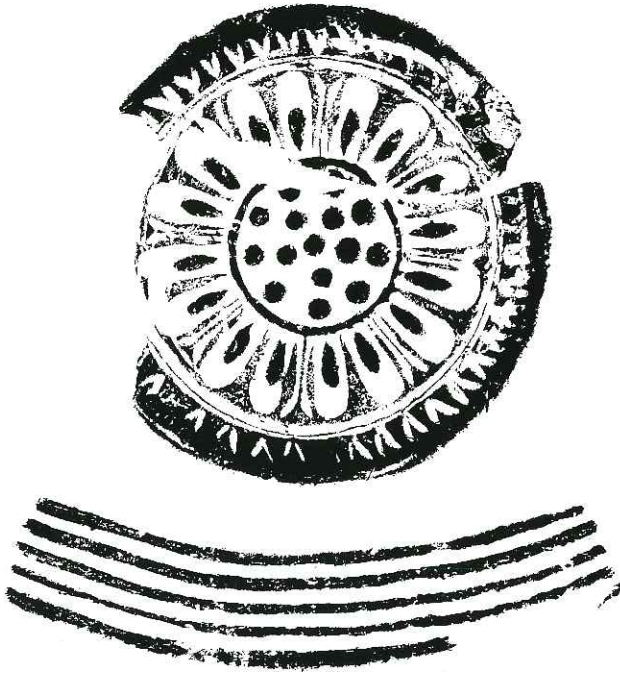
瓦 類 今回出土した瓦類は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦等があり、総数コンテナ50箱分に及ぶ。出土場所は包含層が最も多く、次いでSK401・SD402の順である。

軒丸瓦で今回出土したものは、NM01(川原寺式)であり総数9点ある。出土場所は包含層及びSD402内からである。軒平瓦はNH01(重弧文)のみであり総数7点ある。出土場所は軒丸瓦と同様である。両者はセット関係にあるもので、白鳳時代に比定され、大鳳寺跡の創建瓦である。NH01については、第3次調査では4重弧文のみであったが今回では5重弧文が目立つ存在となっている。

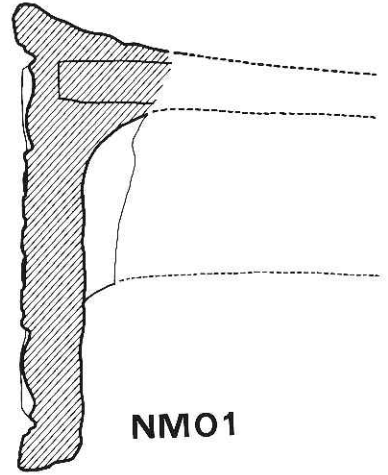
平瓦については凸面に格子タタキをもつもの・縄目タタキをもつもの・タタキを完全にナデ消すものの3種がある。これらの出土地点別傾向としては、SD402が格子タタキを主体としているのに対し、包含層・SK401では格子タタキと縄目タタキが折半している。タタキをナデ消すものについてはSD402内より1個体のみ出土している。丸瓦については行基式のみで、現在の中では玉縁は確認していない。



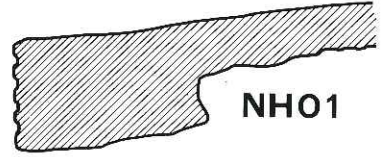
大鳳寺出土軒瓦編年図



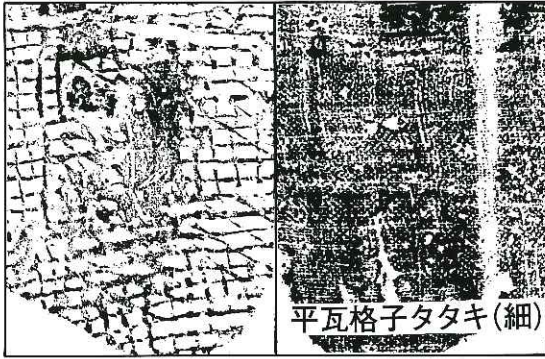
大鳳寺創建瓦



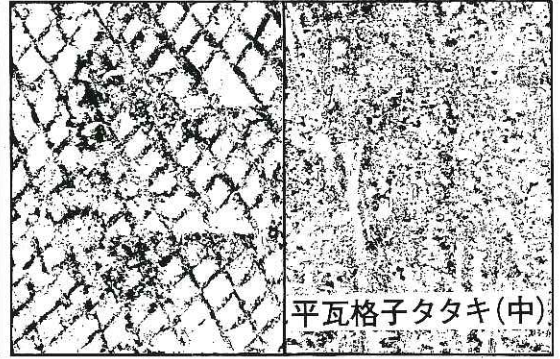
NMO1



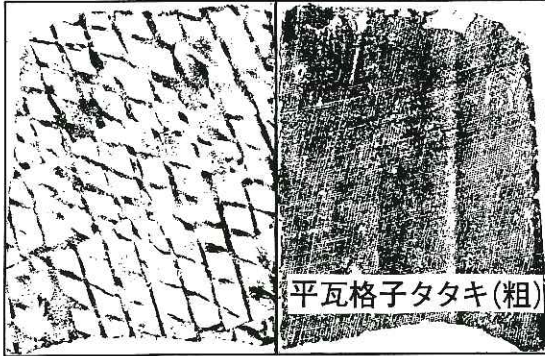
NH01



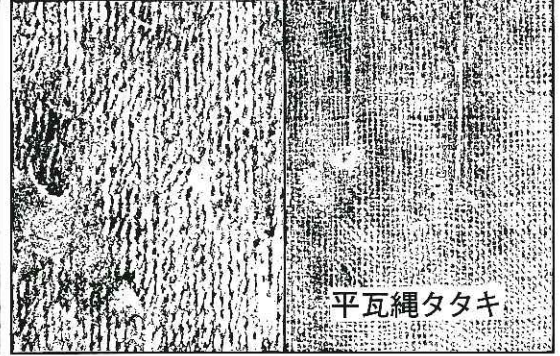
平瓦格子タタキ(細)



平瓦格子タタキ(中)



平瓦格子タタキ(粗)



平瓦縄タタキ

軒丸瓦・軒平瓦・平瓦拓本

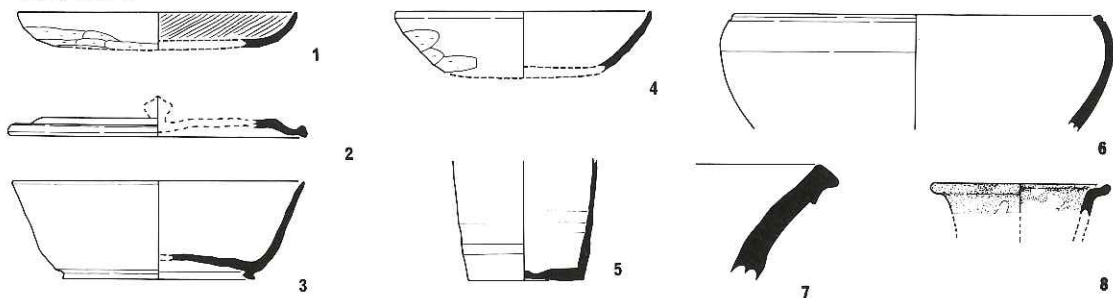
土器類 今回の調査で出土した土器類には、須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・緑釉陶器・灰釉陶器・三彩陶器・近世陶磁器・陶硯等がある。

出土場所は、包含層・遺構内からであるが、良好な資料には恵まれていない。以下、主要遺構であるSK401及びSD402出土土器について概述する。

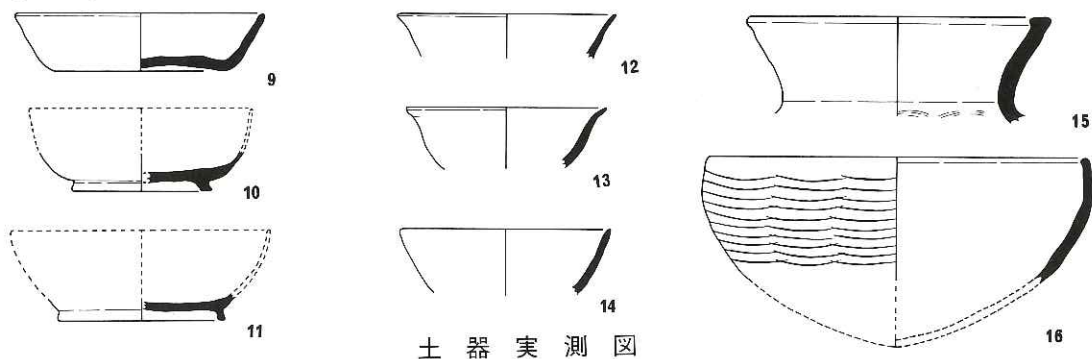
(SK401) SK401内より出土した土器には、土師器の杯・皿・碗・盤、須恵器の杯蓋・杯身・壺・甕・鉄鉢、灰釉陶器の壺、三彩陶器の小壺等がある。(1)は土師器皿であり外底面ヘラケズリ、内面に一段放射暗文を施す。(4)は碗であり外面をヘラケズリする。(2・3)は須恵器杯である。(8)は所謂奈良三彩の小壺である。一部に古い時期の混入品が認められるが、奈良時代から平安時代初頭にその主体がおかれる。

(SD402) SD402内より出土した土器には、土師器の杯・皿、須恵器の杯・高杯・甕・鉄鉢等がある。土師器はその遺存状況が悪い。須恵器杯には高台を貼すもの(10・11)と貼さないもの(9)とがあり、前者には型式的に古いもの(10)と後出的なもの(11)とがある。(16)は鉄鉢であり、外面を丁寧にヘラミガキし、黒ウルシらしいものを全面に塗っている。他に円面硯・特殊硯が各1点出土しているが、後者については後述する。時代的には奈良時代の古い時期におかれよう。

SK401



SD402



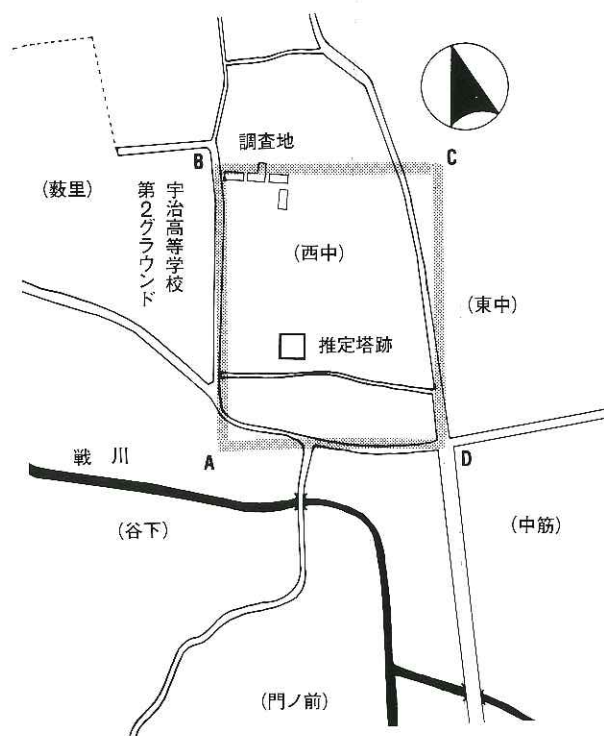
土器実測図

4. ま と め

遺 構 今回検出した遺構の内、直接その規模・内容にかかわるものに第1・2トレンチで検出した溝SD402と第4トレンチで検出した溝SD407がある。

SD402が寺院の区画にかかわるものであるらしいことは、その埋土の層位・出土遺物・規模等より充分推定し得る。では、いかなる性格を持つものであったろうか。かつて大鳳寺跡周辺の現有道路がその寺域を留めている可能性を指摘した^{注5}。特にその中で調査地と宇治高等学校第2グラウンドとの間の南北道路が第3次調査で検出した溝SD01と併行しており、また瓦積基壇もその辺を合わせているらしいことは地形的に見て寺域西限の可能性が強いことも指摘した。今回検出したSD402南北溝部はこの道路東端部直下にその東肩があり、そこから東西溝部が直角に東へのびている。このような状況は、南北道路が寺域西限とする限り、SD402が寺域の西・北限を示すと考えられる。SD402をこのように考えるならば、下図中のA-B-C-Dが現状の中では寺域と想定できるのであって、南北1町半・東西1町の規模となる。ただ、注意しなければならないのは、この寺域は創建期の姿なのであり、SD402が平安時代をまたずに埋没していることは寺域が寺院の改修等に伴い変動していることの可能性を示す。今までに出土している瓦より奈良時代・平安時代初頭の2回の改修が予測できるが、SD402が一見した限りでは格子タタキの平瓦のみ出土するということは、奈良時代の改修に伴い廃絶したとも考えられよう。また、SD402は溝というより築地の雨落溝の可能性が高いことを指摘しておく。SD407も層序的に平安時代初頭の改修に伴い建てられた建物の関連遺構と思われる。

今後、創建期の復原のみならず、その後の寺の変容についても充分調査する必要があると考える。



寺域想定略図

遺物 今回出土した遺物についてはその整理が完了していないため、細部については不明な部分がある。したがってここでは気付いた点2～3をのべ遺物のまとめとする。

SD402出土の平瓦が格子タタキによって占められていることは前述したとおりであり、軒瓦についても川原寺式と重弧文のセットのみである。このことは、寺院建立にさいして外郭の築地塀という周辺部分まで一気に造り上げていることを示しているのであり注意しておかねばならない。また、川原寺式軒丸瓦は今回の調査での出土分も合わせて今までに40個体以上が各地点より出土しているが、このすべてが一範で作られているようである。このように創建瓦が一範のみによってまかなわれているためか、SD402より出土したものの中には周縁部の面違い鋸歯文様が不明瞭となっているものがある。この不明瞭さが範の摩耗によるものであれば、その細密な分析を今後実施していけば創建時の築造順序を割り出すことが可能であると思われ、今後の資料の蓄積が期待される。

最後にSD402より出土した陶硯について若干ふれておく。

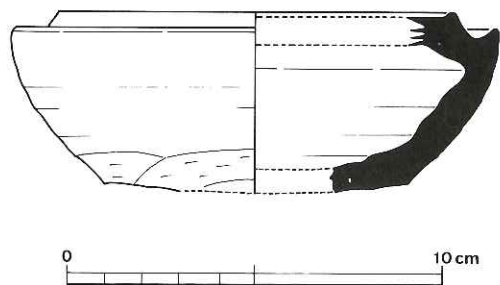
SD402より出土した硯は数点あるが、大半は所謂普通の円面硯であるのに対し、下図に示した1点のみがやや特殊なものであった。形態は、やや深めの杯状部の上に蓋をすかさうで硯面を貼すものであり、硯面の周囲に低い堤をもうけている。また、底部には穿孔の痕跡が認められる。法量は直径13.2cm、硯面直径10.6cm、器高4.8cmであり須恵質に焼きあげられている。このような形式の硯は管見の限りでは大鳳寺跡の北方400m 地点にある飛鳥時代瓦窯跡の隼上り瓦窯出土一例のみである。^{注7} 両遺跡には年代的な差をもちながらもこのような特殊な硯を集中して出土することは注意しておきたい。

大鳳寺跡の発掘調査を計画的に実施してまだ2年目ではあるが、徐々に壮大な古代寺院の一端が明らかとなってきた。今回検出したSD402の存在は今後の寺域追究の大きな手がかりとなるものであろう。今後の発掘調査の成果を期待してやまない。

(杉本 宏)



隼上り瓦窯出土特殊硯



SD402出土特殊硯

付 発掘調査に参加して

今回、大鳳寺跡の発掘に参加して始めて調査を体験したわけですが、これ程種々な手順を経るとは思いませんでした。まだまだ初心者ですが今後とも努力したいと思います。(上村和也)



発掘で土まみれになりながら想いを馳せるのは、古代宇治の人々のパワーについて。白鳳の昔に法隆寺並みの寺院を建てるなんてすごい事でものね。この感動をもっと多くの人たちに実感してもらいたいと思います。(安川優子)



慎重にトレンチを掘り下げてゆく。一枚の瓦が土の中から現れた。私の掘り出した瓦が歴史を支えているとは何とすばらしい事でしょう。このスケールの大きさを持ち続けたいと思います。(田中康)



調査に参加して早や2年が過ぎました。こうして月日と共にまた新しい歴史を作っているのが私達だなんて、すばらしいことだと思います。2年間本当にありがとうございました。(小幡倫子)

[注]

- 注1 山田良三「寺院の建立」(『宇治市史』第1巻、昭和48年)
- 注2 「大鳳寺跡発掘調査会」により発掘調査。未報告。
- 注3 杉本 宏(『大鳳寺跡第3次発掘調査概報』、宇治市教育委員会、昭和58年)
- 注4 今回の発掘調査に関して、土地所有者である久保見勇氏より多くの援助を受けている。記して感謝したい。
- 注5 杉本 宏(『大鳳寺跡第3次発掘調査概報』、前掲)
- 注6 今回の調査終了まぎわの拡張で昨年度検出の溝SD01の延長部分を確認した。SD01は昨年度より5m程北にのび、そこで終息もしくは北へ曲ると考えられる。
- 注7 杉本 宏・橋本 稔(『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』、宇治市教育委員会、昭和58年)

昭和59年3月30日 印刷

昭和59年3月31日 発行

大鳳寺跡第4次発掘調査概報
(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第6集)

(編集
発行)

宇治市教育委員会

京都府宇治市宇治琵琶45番地

TEL 0774-22-3141

(印刷)

株式会社 成 文 社

